

在宅医療における臨床検査技師の未来像

学生を目指す臨床検査技師の在り方と今後の学生教育

◎井越 尚子¹⁾
女子栄養大学¹⁾

【背景と現状】チーム医療が必然となった現在、多職種連携の構成メンバーに臨床検査技師が含まれるようになってきている。中には、臨床検査技師が中心的存在で活躍するところもあり、その実績が伺える。このように社会情勢に合わせた医療現場の変化に沿うよう、臨床検査技師教育のカリキュラムが数十年ぶりに見直された。医療職種では後手に廻ったが令和4年春から実施に踏み切った。その背景は加速する高齢化とそれに伴う医療の増大や多様化、またチーム医療推進による業務拡大などの環境変化への対応であり、技術や知識のみならず、役割や立場ではなく医療人としての自覚を求めることにある。言い換えれば一人の人間としての意識改革と言えよう。

座学面では福祉や介護、在宅医療や認知症などに触れ、また接遇面も強化された。臨地実習では臨床参加型として充実化、項目化が図られ、「必ず実施させる」にチーム医療は置かれているのは当然である。しかし、臨地実習の教育内容では在宅や訪問診療にも触れているが、チーム医療の括りに必須化できないのが現状である。在宅や介護といった訪問医療等では、必ずしも医師が行うわけではなく、看護師だけで行う場面も多いことから、これらにおける実習指導者は医師又は看護師とすることを妨げないと注釈付きではある。この文章が付いたおかげで在宅研修の実現に期待は大きい。だが、正直なところ、医療体制の方針や状況に因るであろう。また、実際、臨床検査技師が殆どいない体制に、新たに受入れ協力願いに、技師長や実習担当者達がどのような橋渡しをしてくださるのだろうかと不安も拭えない部分もある。

さらに、臨地実習指導者の要件が規定され、実習単位数も増えた。現場には負担が増し、養成校にとっては実習依頼先を複数にしなければならない状況も余儀なく迫られることも予想できる。ここで考えられるのは、在宅研修を別な医療機関への依頼が可能ではないか。是非ともこのような要望を受けた場合、その要望に是非ご協力をお願いしたいと思う。

学生にとって、実践の場を学ぶ臨地実習は将来の選択に影響を及ぼす。先輩の働く姿勢、プライドある責務や弛まぬ向上心などを目の当たりにすることで、学生のやる気スイッチがオンになり目標に向かう源となる。しかし自分には相応しくないと悩むケースもゼロではない。非常に素直な立場なのである。その理由や状況は様々で一概には言えない。更に加えて、家庭内と家庭外環境の成長過程の問題を抱え、学習以前の困難事例が近年増え、解決策が迷宮入りすることも否定できない。このような局面を踏まえ、指定講習会ではディスカッションいただいているが、養成校側としてもサポートをしていかねばならない。これら含めて、臨地実習の体験で、学生自身の目で、肌で感じ、自分の進むべき道を考える貴重な機会になることを願うものである。

【在宅研修】本校は栄養学の教育を土台に臨床検査養成課程を昭和52年に開講し、実習は4年次に大学としては3ヵ月間と長く設けてきた。3年次には栄養士の校外実習も組んでいる。近年は介護・看護の接遇実習も行い、医療人としての心得を習得させてきた。臨床検査技師の職域は、臨床医学のみならず予防医学領域、つまり健康増進も含めた生活管理面にも関わられる。つまり、本校のダブルライセンス、名付けて“臨床栄養検査技師、栄養学を学んだ臨床検査技師が大いに力を活かせるのではないか。在宅医療における居宅での疾病管理は三次予防にあたり、一次、二次予防もできれば健康管理システムが構築される。高齢期を迎えても健康かつ自立して生活できれば、医療費削減にも寄与することになる。チーム医療に関わる両職種を知り得たことで多様な人材育成に寄与しているものと確信している。2015年より『チーム医療を考える』として、技師の活躍する医療現場や技師の在り方を研修を通して検討を重ねてきた。2017年本学会で報告後の研修の様子や学生の考えや意見、意識変化を捉えまとめたことを紹介する。